

## 教育先進国フィンランドの図書館に学ぶ学習支援

その他（別言語等） のタイトル	Lessons in Learning Support from libraries in Finland, One of the Most Advanced Countries in Education
著者	千葉 浩之
雑誌名	大学図書館研究
巻	101
ページ	35-43
発行年	2014-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3794">http://hdl.handle.net/10258/3794</a>

# 教育先進国フィンランドの図書館に学ぶ学習支援

千葉 浩 之

**抄録：**大学図書館に学習支援や教育活動への関与が求められるなか、教育先進国フィンランドの図書館を訪問する機会を得た。ここに同国の図書館が行っている学習支援について報告する。大学図書館については、学習空間と情報リテラシー教育を取り上げる。特に後者においては大学図書館間の連携が見受けられる。また、課程に寄り添い、内容を高度化することで学習支援だけでなく研究支援にまで至っている。公共図書館については、啓発的な取り組みを3つ紹介する。それらは館種は違えど、大学図書館が学習支援に取り組むにあたり示唆を与えてくれると思われる。

**キーワード：**フィンランド、学習支援、情報リテラシー教育、研究支援、場所としての図書館、公共図書館

## 1. はじめに

北欧に位置するフィンランドは、日本より一回り小さい国土（そのうち7割が森林で、1割が湖）に、北海道と同じくらいの人口が暮らしている。同国を代表するものとして、ムーミンや洗練されたデザインを思い浮かべる方も多いだろう。近年はPISA（OECD生徒の学習到達度調査）での好成績を受け、初等教育に注目が集まっている。さらに、世界経済フォーラムのレポートによれば、高等教育やICTの国際競争力もトップクラス<sup>1)</sup>である。また、読書好きの国民性を背景とした図書館サービスの充実ぶりから、図書館先進国とも呼ばれている。

平成25年度国立大学図書館協会海外派遣事業の助成を受け、11月2日から10日にかけて同国の図書館を訪問する機会を得た。大学図書館に学習支援や教育活動への関与が求められる<sup>2)</sup>なか、教育先進国フィンランドの図書館の取り組みを調べるというのが訪問の目的である。以下に調査の成果と所感を報告する<sup>3)</sup>。

### 1.1 訪問先

以下の4大学を訪問し、それぞれの大学図書館で情報リテラシー教育を中心に学習支援について聞き取り調査を行った。Turkuを除く3館では、のべ31名の図書館職員を前に日本の大学図書館における学習支援の事例を発表する機会を得た。

- (1) University of Helsinki
- (2) University of Turku
- (3) University of Oulu
- (4) University of Lapland

(1)は首都ヘルシンキにある、学生38,000人を擁する同国最大の大学。世界大学ランキングでも上位に顔を出している。(2)は南西部の古都トゥルクにあり、学生数は20,000人。(3)は中部のハイテク都市オウルにあり、学生数16,000人。(4)は北

極圏に程近いロバニエミにあり、学生数5,000人。

また、公共図書館も調査の対象とした。これは、公共図書館は同国がPISAで好成績を収めた一因にも挙げられ、教育的な取り組みは日本の大学図書館にとっても参考になると思われるためである。そのため本報告は大学図書館だけでなく、以下の公共図書館4館において見聞したことも含む。

- (1) Pasila Library
- (2) Library 10
- (3) Meetingpoint@lasipalatsi
- (4) Turku City Library

なお、(1)、(2)、(3)はHelsinki City Libraryに属し、(1)が中央図書館である。

### 1.2 フィンランドの高等教育

フィンランドには高等教育機関として14の大学と24の応用科学大学がある（近年統合が進んでおり、ここから減る可能性がある）。前者は学術研究に重点を置き、後者は職業教育を通して実務家を養成する。

日本とフィンランドの大学については、以下のような違いが挙げられる。大学全入時代を迎えつつある日本に対して、フィンランドの場合、入学できるのは希望者の3割ほどと難しい<sup>4)</sup>。修業年数は一般的に学士課程が3年、修士課程が2年で、その後博士課程がある。学費が無料ということもあり、じっくりと学ぶ（在学期間が長くなる）傾向がある。学士課程が日本より1年短い、日本の初年次学生に対して行われるような教養教育はフィンランドにはない<sup>5)</sup>ようである。大学入学資格試験の問題<sup>6)</sup>を読んでみたところ、単なる知識だけでなく論述する力も入学前に求められている印象を受けた。また、2大学が財団による運営で、残りがすべて国立大学という点も大きな違いと言えるだろう<sup>7)</sup>。

## 2. 大学図書館における学習支援の現状

こうした違いを踏まえて、大学図書館が行っている学習支援として、学習空間と情報リテラシー教育に着目したい。また、最後に複数の大学図書館で話題に上がったトピックをトレンドとして紹介する。

### 2.1 学習空間

近年、日本では大学図書館内にラーニング・コモンズを設置する例が増えているが、訪問時に行ったプレゼンテーションの際に尋ねたところ、この言葉を知っている図書館職員は31名中1名だけであった。日本およびラーニング・コモンズの輸入元である北米の大学図書館とは事情が異なると言える。フィンランドの場合は、一般に学部もしくは図書館内にラーニング・センターを設置していると言う。そこではパソコンやコピー機、プリンター等を備え、学習の場となっている。

以下では図書館とラーニング・センターという2つの学習空間を軸に University of Helsinki と University of Oulu の事例を紹介する。

#### 2.1.1 Helsinki University Library と Learning Centre Aleksandria

University of Helsinki はヘルシンキの都心にあり、その中央図書館は外壁を放物線状にくりぬいたような窓が印象的な建物である。図書館に隣接して Learning Centre Aleksandria がある。



写真1 Learning Centre Aleksandria

訪問した際も写真1のようにたくさんの学生で活気に溢れていた。写真右側に見られるように、入り口そばに立ち席で使うパソコンが並び、ちょっとした情報収集や学生同士の待ち合わせにも利用されている。学習用の座席やグループ学習室も備えられているが、施設の特色は写真左側に見られるような個人用のパソコン席の多さにある。また、図書館が市

民にも開かれているのに対し、こちらは学生のためのクローズな施設で夜間も利用できる。なお、現在のところ施設内での人的支援は行われていないとのことであった。

一方、図書館の内部は、白を基調とした色使いや各フロアの中央を貫く吹き抜けにより明るい印象を受ける。また、閲覧室内に据え置きのパソコンはほとんど見当たらず、Learning Centre Aleksandria と対照をなしている。居心地のよい寛いだ雰囲気なのか、ソファでゆったりと雑誌を読む姿や、閲覧席でじっくりと資料やノートパソコンに向き合う姿が見受けられた。

館内は基本的に小声での話やノートパソコンの使用が認められており、静寂さが求められる空間は奥のフロアか専用の部屋に限られていた。一方でディスカッションのできる空間も10室あるグループ学習室に限られている<sup>8)</sup>。

学生に人気のサービスはキャスター付きのキャビネットのレンタルである。28日間図書だけでなく勉強道具一式を入れておけるため、身軽に来館し、好きな場所で学習を再開できる。他の学習施設と比べた際、図書館の強みはたくさんの紙の資料を収集できる点にあるが、それを支えるサービスと言えよう。これは後述の Oulu University Library でも確認できた。



写真2 Helsinki University Library でキャスター付きキャビネット（右手前）を利用する学生

紙の資料に関連して、Learning Centre Aleksandria や食堂に通じる出入口（学生が頻繁に行き来する）のそばには、教科書をそれぞれ複数冊揃えた書架が並んでいる。教科書は通常の図書より貸出期間を短く設定されており、多くの学生が利用できるようになっている。また、書架のそばにはQRコード付きの掲示があり、教科書が電子ブックとしても読めることを知らせていた。こうした教科書の特別



扱いや電子ブックの紹介は、他の大学図書館でも見受けられた。

館内での人的支援としては、メインカウンターの他に各フロアにインフォメーション・デスクがあり、職員が他の業務を行いながらちょっとした質問に応じていた。一方で上級生の活用も含めた学習相談デスクは見受けられなかった。

### 2.1.2 University of Oulu の Science and Technology Library Tellus

University of Oulu のメインキャンパスは Helsinki とは対照的に郊外にある。建物同士が長い廊下でつながっており、いったん建物内に入れば外に出ることなく目的の施設までたどりつける。

その理学部と工学部の図書館である Science and Technology Library Tellus は、ラーニング・センターとしての側面も併せ持つ<sup>9)</sup>。入館すると、たくさんの個人用のパソコン席が出迎える。中ほどまで進むと、書架やコピー機、プリンター、さらに人数に応じて自由に組み合わせられるテーブルが並ぶ。**写真3**のようにひとりから5、6名のグループまで学生たちが賑やかな学習空間を構成しており、ラーニング・コモンズに近い印象を受けた。



**写真3** University of Oulu の Science and Technology Library Tellus

また、この図書館には中央付近に**写真4**のようなガラス張りの図書館職員のオフィスがあり、学生が情報検索で困ったときに相談できるようになっていた。一方でカウンターはあるものの、職員が常駐している様子は見られなかった。相談窓口の設置にあたっては、相談者のプライバシーと認知しやすさとの間でジレンマが生じるが、ひとつの解決策を提示しているように感じられた。

なお、図書館職員のオフィスはどれも個室か数名規模の小部屋で、1フロアに島が並ぶオフィスは見



**写真4** 図書館職員のオフィス

当たらなかった。一方で休憩室は広く、そこがコミュニケーションの場となっていた。

## 2.2 情報リテラシー教育

以上、学習空間としての大学図書館を見てきたが、館内での支援は日本のほうが手厚い印象を受ける。一方で情報リテラシー教育については、国際的な高等教育改革を背景に国を挙げた努力が垣間見える。ここでは大学図書館全体の取り組みを述べたのちに、個別の事例を2つ紹介する。

### 2.2.1 大学図書館間の連携

欧州の高等教育圏の構築を目指したボローニャ宣言(1999年)を受けて、フィンランドは大学改革に着手した。『Education and Research 2003-2008. Development Plan (教育・研究振興計画 2003-2008)』<sup>10)</sup>において教育省(当時)より、情報リテラシー教育への積極的な関与を求められていた大学図書館は、同省の支援を受け、2004年に Helsinki University Library を中心に国家プロジェクトを立ち上げた。その年のうちに同プロジェクトは、情報リテラシー教育を大学のカリキュラムに含める提言<sup>11)</sup>を取りまとめた。これは新カリキュラムの策定を翌年に控えての出来事であった。この提言は大学に対する要望に止まらず、教育カリキュラムを新入生レベル、学士レベル、修士レベルに分類することで、それまで大学によりまちまちであった情報リテラシー教育にガイドラインを示すものであった。これにより同国の大学における情報リテラシー教育が本格化することになる<sup>12)</sup>。

この提言は強制力を持たないが、訪問した4大学図書館とも全ての課程ではないものの情報リテラシーに関する講義を開いており、提言の効果が感じられた。講義は当然ながら ECTS (欧州単位互換制度) に基づいて構成されており、スタイルとしては

LMS が積極的に活用されていた。Lapland University Library の担当者によれば、時間と場所が拘束される対面講義よりも e-learning を好む学生が多いとのことであった。

上述の国家プロジェクトは情報リテラシーに関するネットワークとして現在も機能している<sup>13)</sup>。2013 年には、大学教育における情報リテラシーの位置付けをさらに高めるべく上記の提言の改訂版を発表した<sup>14)</sup>。これは欧州委員会内のプロジェクト EMPA-TIC (EMPowering Autonomous learning Through Information Competencies)<sup>15)</sup> が EU 諸国の高等教育部門に対して行った勧告<sup>16)</sup> を受けてのものである。

改訂版では、情報リテラシーが社会生活を送るうえでも重要であり、そのために様々な教育関係組織が協力する必要性を説いている。また、情報リテラシーの教育カリキュラムとして博士レベルを追加している。日本では情報リテラシー教育といえば初年次学生の学習支援と結び付けて考えがちだが、フィンランドの大学図書館は研究活動の支援や、大学を越えて社会における意義までを見据えている。

ネットワークの取りまとめ役を務める Leena Järveläinen 氏 (Turku University Library) によれば、今後は実務を充実させるべく、大学図書館間で教材を共有する仕組みを構築したいとのことであった。

## 2.2.2 情報リテラシー教育の内容 (Helsinki University Library の事例)

情報リテラシー教育の具体的な取り組みは大学によって差があるが、ここでは Helsinki University Library の事例を紹介したい。先述の提言に従って情報リテラシー教育をレベル別に見ていく。

新入生レベルでは、図書館を使えるようになることに主眼が置かれる。University of Helsinki では、IT 部署が新入生必修講義 ICT Driving Licence<sup>17)</sup> を開いている。ここで学生はコンピューターの仕組みから、文書作成や表計算ソフト、情報セキュリティに至るまで ICT の活用方法を学ぶ。図書館はこの講義の情報探索を担当しており、これにより新入生レベルの情報リテラシー教育に関しては全学生をカバーできているとのことであった。

学士レベルでは、Web of Science や Scopus といった国際的な文献データベースや文献管理ツールの使い方が中心となる。これは学士課程が与えられたテーマで文献を収集する時期と見込んでのことである。なお、初等教育の段階より英語教育が盛んであり、学生は英語論文を読むことを苦としない。こ

のレベルについては、概ね 8 割の学生に対して教えることができているとのことであった。

修士レベルでは、主に著作権や引用方法について教える。これは修士課程が自らテーマを設定し、主体的に研究していく段階であることに対応したものである。執筆した論文の投稿対象雑誌の評価についても初歩的な知識を伝える。学生への普及率は 2, 3 割とのことであった。

博士レベルでは、より研究活動に即した内容となる。研究活動の基盤としてデータマネジメントとそのプランニングを、最新の研究動向を追うツールとして RSS や各種アラートサービスを、そして研究成果を広く共有するための手段としてオープンアクセスを教える。とりわけデータマネジメント教育については、先進的な取り組みと思われる。担当者によれば「重要であるにも関わらず、どの部署も教えていないので、図書館が教えることにした」とのことである。なお、このレベルの学生への普及率は 1 割弱とのことである。

以上のレベル別の教育内容は実際には明確に分けられるものではなく、前の段階で扱ったものの復習や高度化が行われる。特に興味深いのは、博士レベルに新入生レベルの基礎的な内容も含まれることである。これはフィンランドでは修士課程修了後に一旦就職し、社会経験を経てから博士課程に進むケースが珍しくなく、その間に登場した、あるいは忘れてしまったサービスやツールをフォローするためである。

情報リテラシー教育の提供形態としては、授業の 1 コマに図書館職員が出向いて教えるかたち、図書館が開講する (単位を発行する) 講義、スポット的な講習会が挙げられる。講習会については、文献データベースの提供元から講師を招くことはせず、あくまで図書館職員が教えると言う。

## 2.2.3 Toolbox of Research

Oulu University は Toolbox of Research (以下、ToR と略す) という、研究者や博士課程の学生の研究活動を支援する Wiki を用意している<sup>18)</sup>。ToR では、文献収集から論文執筆、研究資金の調達、研究成果の社会還元に至るまで、研究活動に関わる様々なトピックを学内の各部署が分担執筆している。

図書館の担当箇所は文献収集まわりに過ぎないものの、ToR そのものは研究者向けの情報リテラシー教育の必要性を認識した図書館が学内の各部署への働きかけて立ち上げたものとのことであった。ToR により図書館はより高いレベルの情報リテラ



シー教育の場を得るとともに、自らを学内の研究活動のなかに位置付けることができたとのことであった。

この企画は学内連携の成功例であるだけでなく、他部署と連携する際に図書館から提供できるものは資料や場所のみならず、情報リテラシー教育もそのひとつとなりえることを示している。

### 2.3 学習支援のトレンド

今回の訪問で、Lapland University Library を除く 3 大学図書館で話題に上ったのが LibGuides であった。これは Springshare 社が提供する文献ガイド作成ツールで、日本でも少しずつ導入する大学図書館が増えている。

Oulu University Library の担当者によれば、フィンランドでは Turku が最初に導入したが、Oulu がそれを追いかけて、2013 年の夏にガイド数で追い抜いたとのことであった。大学図書館間の連携は助け合いだけでなく、競争意識も生み、結果的にサービスの向上へつながっているように感じられた。Helsinki も膨大なデータベースのガイドとして導入を検討しているとのことであり、文献ガイドの提供は過熱しそうである。なお、公式なプロジェクトではないが、有志により Facebook 上のグループ Suomen LibGuides-käyttäjät にて、情報共有が図られているとのことである。

## 3. 公共図書館で見つけた学習支援のヒント

近年、日本の大学図書館では学生との協働企画が盛んに行われているが、今回の訪問した大学図書館ではそうした事例は聞けなかった。一方で、支援の対象者へ近づいていく、ないしは彼らとともに何かを行うという点で、公共図書館の取り組みは館種は違えど刺激を与えてくれる。事例を 3 つ紹介したい。

### 3.1 KIRKOU プロジェクト

Helsinki City Library の中央図書館である Pasila Library では、ヘルシンキ市内の学校（基礎教育学校：日本の小中学校にあたる）と連携した KIRKOU プロジェクト<sup>19)</sup> について話を聞くことができた。この名称はフィンランド語の図書館（*kirjasto*）と学校（*koulu*）に由来している。

ヘルシンキ市内の学校図書館の整備は学校によりまちまちであり、ヘルシンキ市教育局にとって児童・生徒に、図書館サービスに親しみ、情報リテラシーを育み、文学に触れる機会を等しく与えることが課題であった。そこで 2008 年から 2011 年にか

て Helsinki City Library が持っている情報リテラシー教育に関するノウハウを学校に教授する取り組みがなされた。図書館職員が教員とともに教育プログラムを作成するもので、現時点では制度として定着し、もはや「一過性のプロジェクトではなく、日常生活になった」とのことである。

このプロジェクトの意義は図書館が来館する児童・生徒だけでなく、彼らの日常生活の長くを占める学校という現場へ関わっていった点にある。日本の大学に目を向けると、研究室や自習室等、図書館の外で学習する学生は少なくない。この事例は彼らに対する学習支援に示唆を与えてくれる。すなわち、彼らの日常的な学習の場へ積極的に出向いてニーズを把握する。あるいは、来館型であれ非来館型であれ、図書館のサービスを売り込む。彼らの相談相手となる教員やスタッフとコンタクトをとり、時宜に合った、長期的な情報リテラシー教育のプログラムを組む、といった方策が考えられる。

### 3.2 利用者が活動する空間

Library 10 は Pasila Library の音楽部門等を母体として独立した図書館である。ヘルシンキ市の中央郵便局の 2 階にあり、館名は住所（番地）に由来する。ここでは、CD を聴いたり、借りたりだけでなく、ギター等の楽器やスタジオも備えており、演奏・収録もできる。また、館内の書架やカウンターにはキャスターが付いており、移動が可能である。それ以外の備品も軽く、持ち運ぶことができる。これは図書館に対する新しいニーズを受け、空間作りを資料中心から利用者中心へと転換したことによる。こうしたフレキシブルな空間は、演奏会やワークショップ等の場としても活用されている。写真 5 のランチタイムディスコもその一例である。なお、同図書館で開かれるイベントのうち 8 割が市民



写真 5 図書館でランチタイムディスコ！  
（写真提供：Kari Lämsä 氏）

の持ち込み企画とのことである。

Library 10 は、(1) 音楽を聴く、(2) 自ら演奏したり、セッションしたりする、さらには (3) 演奏を発表し合うといった音楽にまつわる活動を広くカバーしている。とりわけ (3) の活動において、利用者同士が交流する場所となっており、このことが資料の品揃えや設備の充実さとはまた別の価値を Library 10 にもたらしている。大学図書館も、(1) 本を読む場所、(2) 自ら考えたことをまとめたり、ディスカッションしたりする場所に加え、(3) 学習成果を発表し合い、学習意欲を触発し合う場所となることができれば、学習空間としての価値をさらに高められるように思われる。

### 3.3 最新テクノロジーとの出会い

Meetingpoint@lasipalatsi は、Library 10 の目と鼻の先にある、レストランやカフェ等が入居する複合施設 Lasipalatsi の 2 階にある。ここには図書はないものの、Helsinki City Library が運営している。無線 LAN が自由に使えるフロアに防音性のあるパーティションで区切られたミーティング・テーブルがあり、都心にあってその名のとおり打ち合わせ場所やビジネスの交渉の場として市民に利用されている。さらに 3D プリンター等の IT 機器と専門スタッフを配置することで、市民と最新テクノロジーとが会う場にもなっている。

学習成果を表現する手段として論文形式は根幹であるものの、テクノロジーの発達によってスライドによるプレゼンテーション、ポスターや動画を用いた発表が容易になって久しい。学習に関して、従来の読書環境の整備や資料の提供といったインプットにおける支援から、成果の表現というアウトプットにおける支援にまで目を配るならば、こうした機器の導入は大学図書館にこそ求められるように思われる。

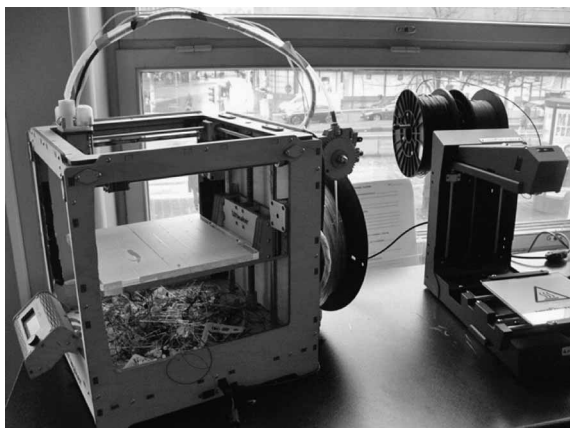


写真6 3D プリンター

また、授業の課題に直接関わらないとしても、図書館のような学年や専攻の違いを越えて誰もが立ち寄れる場所で最新テクノロジーに直に触れられることは、学生の知的好奇心を大いに刺激するだろう<sup>20)</sup>。

## 4. おわりに

これまでフィンランドの大学図書館と公共図書館における学習支援に関わる取り組みを見てきた。最後に僭越ながら情報リテラシー教育と学習支援に対する所感を述べて、本報告を結びたい。

### 4.1 情報リテラシー教育というミッションの認知

情報リテラシー教育は、フィンランドの大学図書館において学習支援の大きな柱になっており、内容の高度化を通して研究活動の支援にまで至っている。

データマネジメント教育や ToR の事例に代表される積極的な取り組みの背景のひとつとして、それぞれの大学図書館が情報リテラシー教育を自らのミッションとして捉えていることが挙げられる。その認識は大学図書館間の連携、すなわち情報リテラシー教育をめぐる提言やネットワークの存在によって強められている。

また、もうひとつの背景として、そのミッションが図書館の外からも認められていることが挙げられるだろう。これは教育文化省の方針によるだけでなく、その方針のもと大学図書館が努力を積み重ねてきたことによると思われる。

日本においても、本報告の執筆時点（2014 年 4 月）で「高等教育における情報リテラシー基準<sup>21)</sup>」の策定が進められているが、これは大学図書館職員のみならず高等教育に関わる人々に、情報リテラシーに関する共通認識を与えてくれるだろう。そこから情報リテラシー教育を図書館のミッションとして内外に認知してもらうには、フィンランドのように提言を発表するのもひとつの方法だが、それを担保するものとして全国の大学図書館において、実績を重ねる必要があるだろう。

Leena Järveläinen 氏が語っていた教材の共有は、情報リテラシー教育の実績を重ねる段階においても負担を減らす助けとなる。全国規模での教材共有の仕組み作りは、大学数が多く、また人事異動で担当者に入れ替わりが頻繁な日本でこそ効果が大きいと思われる。教材のアップロード数やダウンロード数等の数値で貢献度を明示できれば、競争意識が生まれ、情報リテラシー教育の質の向上にもつながるだろう。



## 4.2 学ぶとはどういうことか？

学習支援に関しては、従来図書館が果たしてきた資料や読書環境の提供も、そのひとつには違いない。それらは蔵書数や貸出冊数、閲覧座席数といった量で評価でき、多いに越したことはない。しかし、より積極的な支援にあたっては、学ぶとはどういうことかという根本的な問いに立ち返る必要がある。

一般的にフィンランドの公共図書館ではゲームソフトの貸出を行っている。ゲームといえば娯楽の印象が強いが、Turku City Library の担当者は「ゲームを通して学ぶことは多い」と言う。大学図書館職員も高等教育に根差しながら、学習に対する思い込みや先入観を排して視野を広げておく必要がある。とりわけ学習スタイルについては、ICT の発達によって今後も大きく変わるだろう。

また、Library 10 において利用者の活動に目を向けて空間構成を変えた事例を取り上げたが、担当者によれば「空間構成だけでなく、職員の働き方も変えた」そうである。端的には「From sitting and waiting to walking and talking」と表現していた。すなわち、受け身の姿勢から、積極的に利用者へ関与していく姿勢への転換である。また、利用者との協働においては、ファシリテーターやイベント・オーガナイザーといった新たな役割も担う必要がある。

今回、学習支援をテーマにフィンランドの図書館を訪問したことは、学習はもとより、大学や教育、図書館について見つめ直す機会となった。場所としての図書館のあり方を考える際、上述のとおり公共図書館から得るものが多かった。そのうち、Helsinki City Library は 2017 年の新中央図書館のオープンを控えて、以下のようなビジョンを掲げている。“The library is a place full of new ideas. By sharing information, knowledge and stories, we are creating a new civic society together.”<sup>22)</sup> 図書館は本や座席ではなく、新しいアイデアでいっぱいの場所と規定されている。図書館職員は、情報や知識、物語を共有できるよう支える役割を果たすべきであり、主語である“we”に当然含まれるべきだと私は考える。“civic”と“academic”の違いはあるかもしれないが、学習支援を引き受ける私たちが目指すべき方向を指し示しているのではないだろうか。

## 謝辞

今回の訪問は、移動日を除くと 5 日間で 9 館を訪ねるというタイトなものでしたが、どの図書館の方

も温かく迎え入れて、そして熱心に説明していただきました。また、不慣れな一人旅に先立ち、北海道大学の池田文人先生、正木幹生先生、留学生の Erkki Lassila さん、ヘルシンキオフィスの田畑伸一郎所長、Tero Salomaa 副所長、Lapland University の職員として札幌で働いている Juha Tuisku さんからご助言をいただきました。現地で在外研究をされていた三重大大学の長澤多代先生には大学図書館の動向を教えてくださいました。さらに国立大学図書館協会で海外派遣事業を担当されたみなさまのサポートや、同事業の Facebook をご覧いただいたみなさまとの交流は大変励みになりました。そして北海道大学附属図書館のみなさまには、決して短くない訪問期間にも関わらず快く送り出してくださいました。みなさまに心より御礼を申し上げます。

## 注記および参考文献

- 1) Klaus Schwab. The Global Competitiveness Report 2013-2014. Full Data Edition. World Economic Forum, 2013. (online), [http://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GlobalCompetitivenessReport\\_2013-14.pdf](http://www3.weforum.org/docs/WEF_GlobalCompetitivenessReport_2013-14.pdf), (accessed 2014-04-30). および Beñat Bilbao-Osorio, Soumitra Dutta, and Bruno Lanvin, Editors. The Global Information Technology Report 2013. World Economic Forum, 2013. (online), [http://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GITR\\_Report\\_2013.pdf](http://www3.weforum.org/docs/WEF_GITR_Report_2013.pdf), (accessed 2014-04-30).
- 2) 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会。“大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－”. (オンライン), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm), (参照 2014-04-30).
- 3) 今回の訪問後の活動実績（成果）は以下の Web サイトに掲載されている。国立大学図書館協会。“国立大学図書館協会海外派遣事業 活動実績”. (オンライン), <http://www.janul.jp/j/operations/overseas/result.html#H25-1>, (参照 2014-04-30).  
また、訪問期間中および訪問前後のレポートを以下の Facebook 上で行った。“国大協海外派遣事業”. (オンライン), <https://www.facebook.com/januloversea>, (参照 2014-04-30).
- 4) フィンランド大使館。“フィンランドで学ぶ”. (オンライン), <http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46063&contentlan=23&culture=ja-JP#higher>, (参照 2014-04-30).
- 5) 池田文人. オウル大学教員養成課程が大学入試で求めるヒューマンスキル. 高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習. 2010, vol.17, p.1-8.



- 6) 具体的な問題は以下で参照できる。福田誠治. フィンランドはもう「学力」の先を行っている. 垂紀書房, 2012, p.173-179. (ISBN9784750512174) および鈴木誠. フィンランドの大学入学資格試験. 化学と教育. 2011, vol.59 no.2, p107-110.
- 7) フィンランドの高等教育に関しては下記リンク先の Politics education および University education で参照できる。Ministry of Education and Culture. “Education”. (online), <http://www.minedu.fi/OPM/Koulutus/?lang=en>, (accessed 2014-04-30).
- 8) Helsinki University Library はグループ学習室を提供するだけでなく、Wiki 上でグループワークの進め方を紹介している。University of Helsinki. “Study circle”. (online), <https://wiki.helsinki.fi/display/Study>, (accessed 2014-04-30).
- 9) 同図書館については以下の PDF ファイルに詳しい記載がある。University of Oulu. “Science and Technology Library Tellus”. (online), [http://www.kirjasto.oulu.fi/assets/files/kirjastoyksikot/tellus/pdf/ENG\\_Tellusite\\_syys2010.pdf](http://www.kirjasto.oulu.fi/assets/files/kirjastoyksikot/tellus/pdf/ENG_Tellusite_syys2010.pdf), (accessed 2014-04-30).
- 10) “Education and Research 2003-2008. Development Plan”. Ministry of Education, 2004. (online), [http://www.minedu.fi/export/sites/default/OPM/Julkaisut/2004/liitteet/opm\\_190\\_opm08.pdf](http://www.minedu.fi/export/sites/default/OPM/Julkaisut/2004/liitteet/opm_190_opm08.pdf), (accessed 2014-04-30).
- 11) “Recommendation for universities for including information literacy competency in the new degree structures”. (online), <http://www.helsinki.fi/infolukutaito/ILopetus/recommendation.pdf>, (accessed 2014-04-30).
- 12) Kaisa Sinikara. “Information literacy between the theory and practice: experiences of the Finnish university libraries”. Informacijska pismenost med teorijo in prakso - vloga visokošolskih in specialnih knjižnic : zbornik prispevkov = Information literacy between theory and practice - the role of academic and special libraries : proceedings. Zveza bibliotekarskih društev Slovenije, 2006, p. 21-28. (online), <http://publikacije.zbds-zveza.si/zborniki/2006-01/sinikara.pdf>, (accessed 2014-04-30). 書誌事項は次の URL を参照 <http://publikacije.zbds-zveza.si/zborniki2006-01/>
- 13) The Council for Finnish University Libraries. “Information Literacy Network of Finnish University Libraries”. (online), [http://www.nationallibrary.fi/libraries/council/syn\\_networks/ilnetwork.html](http://www.nationallibrary.fi/libraries/council/syn_networks/ilnetwork.html), (accessed 2014-04-30).
- 14) “Recommendation for Finnish universities: Information literacy in academic studies”. (online), [http://www.nationallibrary.fi/libraries/council/syn\\_networks/ilnetwork/Files/liitetiedosto2/ILsuositus\\_EN.pdf](http://www.nationallibrary.fi/libraries/council/syn_networks/ilnetwork/Files/liitetiedosto2/ILsuositus_EN.pdf), (accessed 2014-04-30).
- 15) EMPATIC. (online), <http://empatic.ceris.cnr.it/>, (accessed 2014-04-30)
- 16) EMPATIC. “Recommendations for the Higher Education Sector”. (online), <http://empatic.ceris.cnr.it/eng/Findings-Recommendations/Higher-Education-Recommendations>, (accessed 2014-04-30).
- 17) University of Helsinki. “ICT Driving Licence”. (online), <http://www.helsinki.fi/tvt-ajokortti/english/>, (accessed 2014-04-30).
- 18) University of Oulu. “Toolbox of Research”. (online), <https://wiki.oulu.fi/display/tor/Toolbox+of+Research>, (accessed 2014-04-30).
- 19) “KIRKOU: kirjasto, koulu ja koulukirjasto”. (online), <http://www.kirkou.fi/>, (accessed 2014-04-30).
- 20) 日本においても慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターにて 3D プリンターが導入されている。慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター.”ファブスペース”. (online), <http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/general/fabspace.html>, (accessed 2014-04-30).
- 21) ドラフトを読むことができる。“高等教育のための情報リテラシー基準 (ドラフト)”. (オンライン), <http://www.janul.jp/j/projects/sftl/seminar2013/04.pdf>, (参照 2014-04-30).
- 22) Helsinki City Library. “Mission, vision, values”. (online), <http://www.hel.fi/hki/Kirjasto/en/About+us/Mission%2C+vision%2C+values>, (accessed 2014-04-30).

---

< 2014.4.30 受理 ちば ひろゆき 室蘭工業大学附属図書館 >

**Hiroyuki CHIBA**

**Lessons in Learning Support from libraries in Finland, One of the Most Advanced Countries in Education**

**Abstract :** The author reports on his visit to libraries in Finland, one of the most advanced countries in the field of education, to learn more about how academic libraries were participating in educational activities and learning support there. In the case of university libraries, the author looks at learning spaces and information literacy. There was a great deal of collaboration among university libraries, particularly in the case of information literacy. He found that academic libraries were not just providing learning support but also providing research support at very high levels of subject specialization. In the case of public libraries, he would like to introduce 3 innovations that he found very enlightening. Although there are differences between public libraries and academic libraries, the author believes that they could open up new pathways for university libraries providing learning support services.

**Keywords :** Finland / learning support / information literacy education / research support / library as place / public libraries